

普段注目していた弟子に
1..1の秘密鍛錬を
提案した春麗。

「さあ、ここで両脚をこう、
左右に広げて……」

精一杯広げられた両脚の間に
浮き出てくる春麗の股間。
男の視線は
その亀裂の中に
吸い込まれてゆく。



なにかに憑かれたかのように、
男の指先が
春麗の秘部に向けられた。

「っ……♡」

一瞬ビクツとした男だったが、
彼女から
拒む気配はないと知ると、
男の手際は
徐々に大胆になってゆく。

陰裂をスラリとなでて、
陰唇の上をなぞるように擦り付け、
穴の中を探查するように
親指を深く押し付ける。



「……………」

男は、今度は舌先を突きつけてきた。薄いパンツ一枚を向こうから感じられるまるで獣のような息付きと、ヌメツとした異物の動き。

股間部の布が、愛液と涎が混ざった液体に濡れてゆく。



服越しに愛撫することに飽きてしまったのだろうか。男は乱暴にズボンの布を引きちぎった。

春麗は半分とるけてる自分のマンコに外の空気が掠れることを感じた。

男の指が彼女の亀裂の中に潜り込んできた。

ゴツゴツした太い指先が、膣の中を奥まで探索するという奇妙な感覚に唇を噛み締めて耐えようとす春麗。



「あっ♡んっ♡
ああっ♡あん♡
んあっ♡」

春麗の性感帯を捕捉した男は
思いつきり
手の動きに拍車をかけた。

すでに
火照っていた彼女の体は、
呆れるほど簡単に
絶頂に達した。

「~~~~~!」

プシューツ、
と大袈裟な水音とともに、
彼女の女性器は
盛大に水を吹き出した。



「ま……待って、
私、今イツたばかりなの……♡」

彼女の哀願の声に
男は聞き耳も持たず、
鋼のように固く勃起した肉塊を
彼女の穴に思いっきり突き込んだ。

すでに十分なまで
弛緩されていた彼女の秘所は、
簡単にその巨根を受け入れた。



「んあん♡ あっ♡ おおっ♡ ああん♡」

熱が冷める間もなく
無理やり引きずり上げられた感覚。

やがて春麗は
男の逸物が自分の中で
更に大きく膨らむことを感じた。

「中につ！！ 中に出して！！！！！！
あっ！ ああっ！ おっ、
おおおおおっ♡♡♡♡」

力強い精液の奔流が
子宮の内壁を強く打ち付ける
感触を味わいながら、
春麗は獣のような喘ぎ声を漏らし、
何度も絶頂した。

再び吹き出された潮と、
結合部の隙間から逆流する精液が
衣服を濡らした。



任務を完遂した
男性器が抜けると、
蓋を失った彼女の女性器は
膣内に残された精液を
思いっきり押し出した。
ビクビクと痙攣する下半身。

その余韻を楽しみながら、
やはり良い弟子を
選んで良かったと
思う春麗であった。

